

宙

谷懐に抱かれた郷
青田波の中を私は

一人歩く

古今変らぬいとなみの風景が
額に嵌った絵となつて映る

父母の眠る墓標の前

葉擦れの止まった深閑の中に佇む

空が銀色の光を放つ

光の中に吸いこまれる自己の魂

私は宇宙と一体であることの真実を察知する

今日も溪流へつり糸を垂れたよ
そしたら

鮎がピチピチ跳ねてな 逃げちまった

川の音が聞こえて

父の声が流れる そうして

無窮の域へ消えた

棚霞の中 私は

尚歩く

薄い影が近づく

魂の触れあうを悟る

なつかしい母の声が面影が私の内を通る

私もいつの日か魂が魄を離れ

たまゆらの命を閉じ終焉を迎えるに

意識を越え

超絶に至るを予感する

春かしら

戸外に身をゆだねれば
菜の花畑の向うから

桃の花びらが私の心に張りつく

緑萌ゆる山裾に

うぐいすの声が二ツ三ツ走る

深閑を貫く竹やぶの暗さの中で

小鳥達のおしやべりの響きを

耳に残しながら歩く

雲の波路の切れ間から

遠慮がちに顔を出す天空欠片

春のやすらぎに浸る私を

川風がなぶる

振り返れば

冬は通りすぎて行ったのに

入相いの空がせまれば

温もりを求めて心がさわぐ

もどり道

さつきなかつた焚き火の煙が

桜の花びらを乗せてたなびく